

和歌山大学  
経済学部同窓会

# 柑芦わかやま

南出陽一(高商7回・故人)筆

柑芦会和歌山支部

編集発行人 坂本 漸  
〒640-8567 和歌山市西汀丁36  
和歌山商工会議所2階  
山中盛義事務所内  
TEL 073-423-1231  
FAX 073-433-4066

## 巻頭対談「森林(もり)の恵み」

和歌山大学

山本 進三 理事(社会連携)・副学長 大学39期

株式会社 山本進重郎商店 代表取締役社長

柑芦会(和歌山大学経済学部同窓会)

坂本 漸(すすむ) 和歌山支部長 大学8期

本日はお忙しい中、貴重なお時間を割いて頂き有難うございます。

本号特集のテーマ「森の恵」について、ご自身のご経験・思いなどをお聞かせ下さい。

(以下太字は 山本 副学長)

私は祖父の代から続く材木会社を経営しております。子供の頃から「木」とはご縁が深く、父に戦後の復興と木材のことを聞いて育ちました。20代半ばまでは筏に乗って木材を1本1本、仕分けしたり製材工場に営業回りをしていました。本当に「木」と共に過ごした20代でした。

日本は古来・神話の時代から、戦後暫くの間まで、

ずっと、木は、家や道具類・家具など、あらゆる物作りに、そして、煮炊きや暖を取るためのエネルギー源として用いられて来ました。

古事記によると、素戔嗚(すさのおの)尊(みこと)がひげを抜いて放つと「杉」の木に、胸毛は「桧」に、尻毛は「槇」、眉毛は「楠」になったと伝えられています。また素戔嗚(すさのおの)尊(みこと)の息子、五十猛(いたけるの)尊は日本全国を植林して回り、最後にこの和歌山(木(紀)の国)で鎮座したとのことです。真偽のほどは別にして、それだけ古代から、日本人は木を親しみ守ってきたことが窺えますよね。



### 柑芦会和歌山支部「令和3年度・支部拡大役員総会」開催のお知らせ

開催日時：令和3年5月22日(土) 午後14時00分 開会

開催場所：ルミエール華月殿 和歌山市屋形町2丁目10番地 073-424-9392

①講演会：14時00分～15時00分

講師：南方熊楠記念館 前館長 谷脇幹雄先生(大学院44期卒)

テーマ：南方熊楠に何を学ぶか

②総会：15時15分～16時00分(議案書は4, 5頁参照)

\*出欠の可否は、左記E-Mail(支部事務局・山中盛義メールアドレス：  
m\_yamanaka@cure.ocn.ne.jp)、にて5月1日までにご返信下さい。

なお、出席連絡には「期別」・「氏名」の記載をお願いいたします。



また山里と森林は切っても切れないサステナブルな関係にあって、山里の人々が火を焚くために落ち葉や枯れ枝、間伐材を薪として利用したため、山林は現在とは比べものにならないほどきれいで松茸なども多く生えていたようです。



伊太祁曾神社 和歌山電鐵伊太祁曾駅・徒歩 5 分  
祭神の植樹神五十猛命は「木の神様」で有名

その後、資源・資材として木が担って来た役割は、安くて便利な石油化学製品にとって変わられました。

家の建築材料も大部分を輸入木材が占めるようになり、山里は過疎化或いは消滅して行きました。

戦後の復興で木材が必要になり、昭和 30 年代には国内の私有林の多くが伐採されてしまいました。それを補うため昭和 40 年代頃から米材、ソ連材が輸入されるようになりましたが、外材は大径木が多く利用しやすいうえ安価だったので内地の森林は次第に放置されるようになり、また山里も薪を取らなくなったため、さらに山林の放置は加速していきました。

時代の流れとしてどうしようもなかった背景はありますが、その当時から国策で森林保護を進めていけば結果は大きく変わっていたかもしれませんね。例えば九州の宮崎では、県の施策として山林のインフラ整備を継続してきた結果、現在でも林業が盛んで中国等にも輸出を行っているようです。

戦後 75 年を経て、日本の森林や木材を取り巻く環境は大きく変わりました。

化石燃料の枯渇や地球環境や生物資源に果たす森林の役割への評価、科学技術の進化による木材の新たな活用法、都市文化を補完する上での農山村漁村

文化を体験する事の重要性への認識などです。

令和の時代になって地球温暖化が進み、化石燃料の使用を抑え、二酸化炭素の排出量を削減する動きが世界的に進められています。森林は炭素を蓄える貯蔵庫としての役割もあり、適切な管理の元、枝打ち・間伐・伐採・植林を繰り返すことで持続的に環境を維持することが可能ですし、木材を住宅などの建築物に使用することで、長期にわたり炭素を貯蔵する手段にもなります。

また最近では化石燃料を利用することなく、間伐材や端材、おがくずなどを利用して発電するバイオマス発電が増えたことで山林を薪として利用していた山里のサイクルが形を変えて蘇ってきているようです。



紀州材を用いた建築 和歌山大学 観光学部棟

行政、事業者団体、企業、学校や研究者、多くの主体が森林の恵みを守り活かす事に取り組まれています。

それは、暫く疎遠になって来ていた、日本の根っこの、木の文化をしっかりと強化して、再び我が国が力強く伸びて行く為に、是非とも大切な事だと考えます。

仰るとおりだと思います。我々日本人は木をうまく利用し、森林・自然と共に共存共栄する文化が根付いています。形は変わろうとも自然を敬うサステナブルな社会の構築のためにも、木の文化を守っていくことは必要不可欠なことだと思います。

今後とも大学と地域が連携して、和歌山の木の文化や産業が栄えて行くよう、私達も同窓の絆でサポートして参ります。

本日は有難うございました。

柑芦会活動へのご参加をお願いします 柑芦会 会長 北村 修一 (大18期)

昨年6月に柑芦会会長に就任しました北村でございます。この度は和歌山支部の皆さまにこうしてお話しさせていただく機会を頂戴し、誠にありがとうございます。



会長として私は、卒業生が母校に一層の誇りと愛校心が持てるよう、また衆知を集め多くの方が参画意識を感じられる柑芦会にするため、次のことを目指して活動を進めております。

- ① 幅広い世代の会員と母校のお役に立てる柑芦会。
- ② 母校と柑芦会本部と各支部が、さらなる一体感を感じられる柑芦会。
- ③ より組織的でオープンな運営ができる柑芦会。

そこで柑芦会では、これまでの「柑芦」編集委員会、学生支援委員会のほかに、新たに全国の支部を支援する「支部活性化支援委員会」と、WEB媒体を使った広報活動の充実およびメールアドレス等の名簿の充実のための「WEB対策委員会」を発足させ、全国各支部からご応募いただいた委員の方々による取り組みを実施中です。

また広報活動については、よりタイムリーに情報をお届けするため、本部と各支部でほぼ毎月メルマガを発行したり、SNSを使った広報も実施しています。Facebookには、「柑芦和歌山」も「柑芦会オフィシャルページ」もあります。Facebookからは、母校和歌山大学の情報や柑芦会の全体像、各支部でのできごとや情報をリアルタイムで知ることができますので、まだの方は是非お試しください。(下欄のQRコードから簡単にご参加いただけます。)

また柑芦会として和歌山支部の皆さまにお願いしたいことは、和歌山支部で開催される総会などのイベントに是非ともご参加いただくことと、60代以下の方々に支部役員としてご参画いただくことです。一人でも多くの方のご参加をお待ちしています。

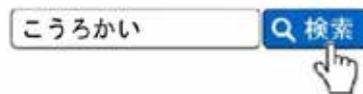
皆さまとのFacebookでの再会を楽しみにしています。



Facebook  
柑芦和歌山



Facebook  
柑芦会オフィシャルページ



柑芦会ホームページ

年会費お支払いのお願い

和歌山支部は支部会員の年会費で運営されています。年会費は3,000円で、主に支部事務局の運営、柑芦わかやまの発刊に使われます。

支払は、同封の振込用紙(郵便局用と紀陽銀行用)のいずれかをお使いください。

なお、ネット等の振込に関しては、下記紀陽銀行口座をお願いいたします。

振込の際にはお名前の前に卒業期等を入れてください。(例:ケイ42コウロ タロウ)

紀陽銀行 本店営業部 普通預金 789216



令和3年2月27日開催 支部役員会風景

# 和歌山大学柑芦会 和歌山支部 令和 2 年度支部総会 議案書

## 第 1 号議案その 1 令和 2 年度活動報告

### ① 支部総会・幹部役員会活動関係

令和 2 年 5 月 23 日 和歌山支部総会：於・アバローム紀の国  
(15 名出席にて全議案承認)

令和 2 年 10 月 10 日 臨時役員会にて門博文代議士（大 36 期）後援会設立を承認

令和 3 年 2 月 27 日 柑芦わかやま・支部総会開催要領検討役員会

### ② 本部・他支部との交流関係（支部長ほか出席）

令和 2 年 5 月 16 日 本部理事会・評議員会（Web 会議）

令和 2 年 12 月 5 日 会長・副会長会（Web 会議）

令和 3 年 2 月 20 日 会長・副会長会（Web 会議）

令和 3 年 3 月 6 日 支部長会（Web 会議）

### ③ 支部機関紙「柑芦わかやま」発行関係

令和 2 年 4 月 20 日 春季号（第 41 号）発行 全 12 ページ

令和 2 年 10 月 15 日 秋季号（第 42 号）発行 全 12 ページ

### ④ 和大・留学生支援活動、NPO 法人・WIN ココトへの協調関係

令和 2 年 5 月 28 日 和歌山大学へ 50 万円拠出

令和 2 年 10 月 1 日 WIN ココト 支援金 10 万円支出

## 第 1 号議案その 2 平成 30 年度決算書承認の件

### 令和 2 年度会計報告

柑芦会和歌山支部

#### 1. 一般会計の部

【収支計算書】 自 令和2年4月1日 至 令和3年3月31日

収入の部				支出の部			
科目	予算額	実行額	摘要	科目	予算額	実行額	摘要
前年度繰越額	1,728,899	1,728,899		総会費	350,000	31,592	於：アバローム紀の国
会員年会費	600,000	393,000	3000円×131名	支部ニュース発行費	250,000	278,268	「柑芦わかやま」41・42号
総会会費	120,000	0		通信費	350,000	306,925	会員宛文書・柑芦わかやま送料等
柑芦会運営補助金	350,000	380,000	通信費助成金等	印刷費	100,000	6,103	案内状・封筒等印刷
預金利息	100	3	紀陽銀行普通	事務所費	120,000	120,000	支部事務所借室
雑収入	50,000	0	総会祝金	会議費	50,000	43,210	幹部役員会2回
				慶弔費	80,000	25,808	他支部祝金、会員慶弔等
				雑費	80,000	25,485	振込手数料、出張旅費等
				支出合計	1,380,000	837,391	
				次年度繰越金	1,468,999	1,664,511	
合 計	2,848,999	2,501,902		合 計	2,848,999	2,501,902	

#### 【貸借対照表】

科目	令和2年4月1日	令和3年3月31日	摘要	科目	令和2年4月1日	令和3年3月31日	摘要
普通預金	156,471	170,441	紀陽銀行本店	正味財産	1,728,899	1,664,511	
当座預金	1,572,428	1,494,070	ゆうちょ銀行				
合 計	1,728,899	1,664,511		合 計	1,728,899	1,664,511	

#### 2. 基金の部

【収支計算書】 自 令和2年4月1日 至 令和3年3月31日

収入の部				支出の部			
科目	予算額	実行額	摘要	科目	予算額	実行額	摘要
前年度繰越額	1,499,514	1,499,514		就活・交流支援金	100,000	100,000	留学生支援（ウイン・ココト）
雑収入	100	10	普通預金利息	大学70周年支援金	500,000	500,000	和歌山大学
				次年度繰越金	899,614	899,524	
合 計	1,499,614	1,499,524		合 計	1,499,614	1,499,524	

#### 【貸借対照表】

科目	令和2年4月1日	令和3年3月31日	摘要	科目	令和2年4月1日	令和3年3月31日	摘要
普通預金	1,499,514	899,524	紀陽銀行本店	正味財産	1,499,514	899,524	
合 計	1,499,514	899,524		合 計	1,499,514	899,524	

## 第2号議案 令和3年度活動方針及び予算案承認の件

### その1 令和3年度事業計画

**基本の方針：** 和歌山大学が立地している地元支部として、実質的に意義がある活動に絞り込み、狙い定めて効果的な活動に持てる能力を活用する。

#### 具体的活動方針

- ① 和歌山大学が立地する地元支部として、和歌山大学が地域特性を生かしながら末永く存立して行くことを願って、積極的に支援活動を進める。
- ② 県民の、社会教育・生涯教育の核として、和歌山大学が活動していくことに積極的に参画して行く。
- ③ 県下の各種経済団体や、文化・芸術団体との連携を深め、大学との関係発展の仲立ちの役割を果たしてゆく
- ④ 和歌山支部会員間の交流、他支部との交流をより深く進めるため、紙ベース(機関誌発行)、インターネットベースでの情報交換を充実する。

### その2 令和元年度予算案

#### 令和3年度収支予算書(案)

柑芦会和歌山支部

##### 1. 一般会計の部

【収支計算書】 自 令和3年4月1日 至 令和4年3月31日

収入の部				支出の部			
科目	予算額	昨年実行額	摘要	科目	予算額	昨年実行額	摘要
前年度繰越額	1,664,511	1,728,899		総会費	350,000	31,592	ルビエール華月殿
会員年会費	450,000	393,000	3000円×150名	支部ニュース発行費	450,000	278,268	「柑芦わかやま」43,44号
総会費	120,000	0	3000円×40名	通信費	650,000	306,925	文書送付料外
柑芦会運営補助金	380,000	380,000	通信費助成金等	印刷費	50,000	6,103	文書外印刷費
預金利息	10	3	紀陽銀行普通	事務所費	120,000	120,000	支部事務所借室
雑収入	50,000	0	総会祝金等	会議費	50,000	43,210	幹部役員会等
				慶弔費	80,000	25,808	会員・大学慶弔支部祝金等
				寄付金	0	0	
				雑費	50,000	25,485	振込手数料、出張旅費等
				支出合計	1,800,000	837,391	
				次年度繰越金	864,521	1,664,511	
合計	2,664,521	2,501,902		合計	2,664,521	2,501,902	

##### 2. 基金の部

【収支計算書】 自 令和3年4月1日 至 令和4年3月31日

収入の部			支出の部		
科目	予算額	昨年実行額	科目	予算額	昨年実行額
前年度繰越額	899,524	1,499,514	就活・交流支援金	100,000	100,000
雑収入	10	10	大学70周年支援金	0	500,000
			次年度繰越金	799,534	899,524
合計	899,534	1,499,524	合計	899,534	1,499,524

#### フェイスブックグループに参加しませんか



柑芦会和歌山 (こうろわかやま)  
 プライベートグループメンバー9人

**グループ情報** 「柑芦会」は、和歌山大学経済学部の同窓会です。「和歌山支部」は、和歌山大学に繋がる大勢の方と一緒に、和歌山大学と和歌山県を盛り立ててゆくことを活動方針にしております。管理者は、「柑芦会和歌山支部」機関紙「柑芦わかやま」の編集委員 渥美が担当しております。

**プライベート**  
 メンバーとグループ内の投稿を見ることができるのはメンバーのみです。

特集 森林（もり）の恵み

## 森林の恵みを守り活かす

大浦 由美 和歌山大学観光学部 教授

1. 人類は生態系の一部であるという認識が広く共有され始めています。これからの産業や暮らしはどのように変わってゆくのでしょうか。

第 2 次世界大戦以降の飛躍的な経済や科学技術の発展は、北半球の先進諸国を中心に私たちの生活を豊かで便利なものにしてきましたが、その一方で、地球環境に大きな負荷を与え、局地的な自然破壊や公害のみならず、温室効果ガスによる気候変動など、地球規模での環境問題を引き起こすまでになりました。

こうしたなかで、1980 年代後半に提唱されたのが「持続可能性」であり、様々なサービスの根本である自然生態系の保全とともに、世代間の衡平（公平）、すなわち、現在の世代だけでなく、未来の世代の欲求も満足させるように地球の資源と環境を持続しなければならないこと、そして我々にはその責任があるのだということが国際社会に呼びかけられたのです。

それから早 30 年が経過しますが、この間、十分とはいえないものの、SDGs として目標が可視化されるなど、あらゆる産業や暮らしのなかで、このことが意識されるようにはなったのではないのでしょうか。また、昨今の異常気象や、COVID19 の世界的流行の発生は、前者については温室効果ガス抑制の側面から、後者については物流や人流をたちどころに遮断する脅威としての側面から、グローバル化社会の基盤である「移動」について問い直しを迫られているように思います。

今後は、食料や水の安全保障の観点から、自国内での食料や生活関連物資の生産・調達により意識されるようになるのではないのでしょうか。このことは、資源や物資の多くを海外に依存してきた日本の社会経済システムのあり方にも大きく影響すると思われま

2. 森林が私達にもたらす恵みは、沢山有ります。しかし、自治体面積に占める森林の割合が高い所ほど、人口が減少しています。森林の恵みが十分には活かされていないように思われます。



戦後、1950 年代頃までは、燃料材としての利用をはじめ、道具や日用品、農業用資材も多くが木製品であり、これらの生産が山村の重要な稼ぎの一部になっていました。また、間伐材や柱や板を採った後の端材、樹皮などにも様々な用途があり、森から生み出される産物はことごとく商品化され、取引されていたのです。

ところがその後、こうした状況が 3 つの点で大きく変化します。第一に、急速な工業化・近代化の進展により、燃料・エネルギーは石油やガス、電気に、道具や日用品等はプラスチック製品やアルミ製品に置き換わり、森林資源利用は主として建築用材としての木材生産に特化してしまったこと、第二に、戦中の軍需による大量伐採により、戦後は「植林」からスタートせざるを得なかったこと、第三に、拡大造林政策の一方で、高度経済成長期の木材需要を満たすために木材輸入が完全自由化された結果、国内林業不振となり、木材自給率が急速に低下したことです。

これらの状況変化がほぼ同時に、かつ急速に進んだことで、山村の生業としての「森林の恵み」の経済的地位も急速に低下し、山村の人口扶養力を減じさせる一因となったのだと思います。

3. 森林と人間社会が上手に付き合えば、地域や国や世界が抱えてくる問題の解決法が見えてくるのではないのでしょうか。

森林分野については、SDGs の目標 15 に「持続

可能な森林の経営」として掲げられていますが、そのほかの目標に対しても重要な関係を持っています。例えば、世界では16億人もの人々が森林に生計を依存しているといわれますが、その人々にとって森林が劣化したり失われたりすることは、貧困（目標1）や飢餓（目標2）の問題に直結します。また、健全な森林を維持することは安全な水の確保（目標6）や海洋資源の保全（目標14）にもつながります。さらに、炭素を貯蔵し気候変動による影響を軽減する（目標13）ことや、山地災害の防止にも貢献し、安全かつ強靱で持続可能な都市の実現（目標11）にも役立ちます。このように、「持続可能な森林経営」の推進が、国際社会の抱える課題解決には不可欠であることから、SDGsへの森林分野の貢献の促進を目的に掲げた「国連森林戦略計画2017-2030」が別途策定され、6つの世界森林目標と26のターゲットが設定されています。

紙幅の関係でここでは紹介しきれないのですが、最新の「森林・林業白書（令和元年度）」の冒頭に、SDGsと森林・林業・木材産業との関係がわかりやすく解説されていますので、是非ご覧いただければと思います。

4.先生の専門分野である、教育や観光での取り組みをお聞かせ下さい。

先ほど述べた通り、戦後において日本の森林資源利用が「建築用材生産」に特化し、いわばモノカルチャー化してきたことが、山村経済の弱体化にも大きく影響してきたといえます。しかし、依然として、森林資源は農山村地域にとって最大の資源であり、「森林の恵み」を今こそ多面的に活かして活性化につなげる必要があります。

自分の専門分野から着目しているのは「森林空間の利用」です。いうまでもなく、各地を特徴づける森林は「観光資源」でもあり、ハイキングや野外スポーツ、キャンプなど、様々なアクティビティを楽しむ場として多くの人々が訪れています。かつてマストツーリズム全盛の時代には、観光道路の建設や、スキー場・ゴルフ場といった大規模開発のターゲットとなり、自然破壊を伴うものも多々ありました。

しかしながら近年は観光スタイルも個人旅行化・多様化するなかで、森林そのものを活用した自然共生型のアウトドアパークが流行しつつあります。例えばワイヤーロープを滑り降りたり、樹上にめぐらされた簡易な吊り橋を渡ったりしてスリルを楽しむ「フォレストアドベンチャー」は、大規模な開発を必要とせず、林地の傾斜をそのまま活用でき、加えて林木を傷つけずに遊具を設置できるために林業経営とも両立できる空間活用として注目されています。また、トレイルランニングやマウンテンバイクなどの森林スポーツの利用は、かつては山林所有者と愛好者との間で、使用許可をめぐる軋轢が問題になっていましたが、現在では、愛好者団体が、林内の巡視や作業道の整備にも協力するなどの互恵的な関係を構築し、地域の森林管理の新たな担い手、サポーターとなっている事例もみられるようになってきました。

さらに、森林空間が人間の心身に与える良い影響についても研究が進んでおり、「森林療法」を活かした保養地整備、社員研修の場としての森林活用などにも関心が集まっています。このように森林の恵みを、森林・林業・木材産業関係者だけでなく、医療や福祉、教育、スポーツ、観光など、より様々な機会と手段で活用し、収入と雇用を生み出す「森林サービス産業」の創出が、地域再生の重要な鍵を握っていると思います。

5.産官学民が更に連携を深めて、森林の恵みを守り活かして行く事について、先生の思いをお聞かせ下さい。

健全な森林を維持し、将来にわたって引き継いでいくには、経済の論理だけでも、環境の論理だけでも無理が生じます。もちろん、いまや希少となった奥地天然林や国土保全上重要な森林については保存的な管理が必要ですが、その他については、持続可能な森林経営の考え方の下で、資源として利用し、社会に活かしていくことが重要です。

しかしながらこの間、私たちの生活のなかから、具体的な「森林とのつながり」が失われてきたことも事実です。地域の木材、林産物、そして森林空間

利用を、私たちの生活のあらゆる側面でうまく取り入れていくことが、地域の森林を健全に維持することに役立ち、ひいては、安全で快適な生活環境の維持にも役立つことを、「身をもって実感」するような機会が必要です。

こうした点で、近年の「木育」の取り組みに注目

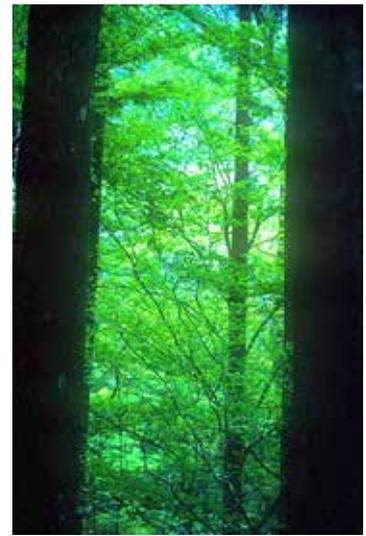
しています。特に和歌山県は山長商店をはじめ、民間の林業・林産業関係者が主導し、率先して取り組んでいるのが特徴です。

関係者の努力に敬意を表しつつ、より効果的かつ持続的な取り組みとなるように、大学としても研究面や教育面でサポートできればと思います。

## かつて「木」は私達の身近に有りました



重要文化財旧和歌山県会議事堂 県文化財課HP  
現在の所在地は岩出市根来



### —和歌山市立博物館 常設展から—



建具・家具

木造船 絵馬



農機具

特集：森林（もり）の恵み  
 特別寄稿 「芳香」  
 門 博文（衆議院議員 大嘗36期）

「木のおいしさーい。」

ある幼稚園の子供たちに木に親しんでもらおうと行ったイベントで子供たちが発した言葉です。木材屋の社長さんから聞かされました。

その方もおっしゃっていましたが私もこのことを聞いてまず頭に「？」の連続でした。私たちにとっては、少なくとも私にとっては、木のおいはい香りです。嗅げば心が安らぐいつまでも嗅いでいたいものです。でも子供たちの反応はそうではありませんでした。

ではなぜこの子供たちはあんな言葉を発したのでしょうか。その答えも前出の社長さんが教えてくれました。それは生まれて初めて嗅ぐ匂いだったので、どう反応してよいか分らず「臭い」という表現になったということでした。

「生まれて初めて」。そうなんです。育った家に木の香りがなかったということです。確かに都会に限らず例えばマンションに暮らすと木の柱がありません。もっと言えば木のようになっているも無垢の木は室内にはありません。そして木はもちろんのこと、畳の間もありません。畳を敷いてあったとしてもそれはいわゆる「フェイク」の畳ですし当然、床の間も床柱もありません。この環境では育っていく過程で木の香りに接することがないのです。

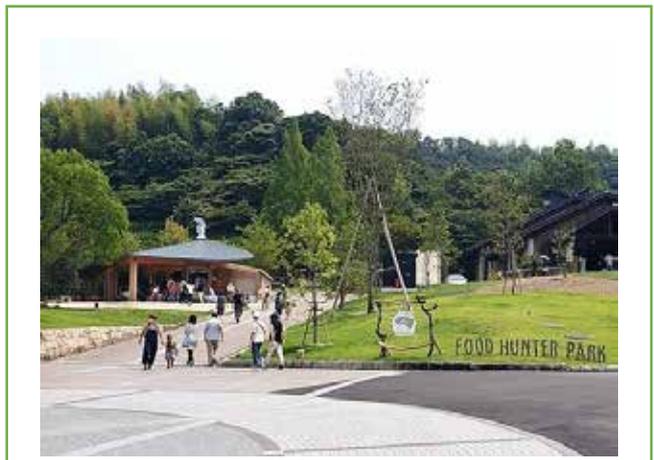
私も同じような体験をしたことがあります。娘の部屋の畳が傷んでいたので本い草の畳に新調してあげました。すると娘から「畳の匂いが鼻について落ち着かない」と想定外の感想を聞かされショックを受けたことがありました。このように“新人類”は私たちが想像している以上に進化（退化？）しているのです。このままいけば木に対する親しみが無くなり現在でも心配されている林業や森林の将来がもっと暗いものになるようで心配でなりません。

木の国和歌山。我が国に樹木を植えて廻ったと『日本書紀』に記される木の神様「五十猛命（いたけるのみこと）」を祀る神社、伊太祁曾神社も和歌山



にあるように、和歌山は木と特別な関わり土地です。この地から日本の森林のそして木にまつわる産業の未来を提言し行動していかなければなりません。そして何よりも環境、地球温暖化の観点で言えば森林資源がCO2を吸

収し酸素を供給してくれるという役割も大切に考えなければなりません。和歌山の森林が輪廻転生して新鮮な空気も経済活動も提供し続けていく。和歌山が重要な役割を担っていることを皆さまと共有していきたいと思ひます。



和歌山市 四季の郷公園 HPより

令和2年7月に道の駅としてオープンした四季の郷公園のFOOD HUNTER PARKは、「Be Wild. 野生を楽しもう。」をコンセプトに、『火の食堂』『水の市場』『炎の囲炉裏』『木の庭』『土の農園』と呼ばれる5つのエリアに分かれています。



近くに木の神様を祀る伊太祁曾神社があります。

特集：森林（もり）の恵み  
 —植林から木材製品の製造販売まで、一貫体制で事業展開—

株式会社 山長商店

和歌山最大の森林面積を有する田辺市で、植林から木材の製品化、また、首都圏で木材製品の販売をされ、一貫体制で事業展開されている同社グループをお訪ねして、お話を伺いました。



代表取締役会長

榎本長治 氏 (山長 10 代目当主)

公職

日本林業経営者協会会長を経て顧問  
 和歌山県木材協同組合連合会会長  
 田辺木材協同組合理事長  
 田辺商工会議所会頭

山長グループ

山長林業株式会社  
 モック株式会社  
 紀南砕石工業株式会社

貴社の概要をお聞かせ下さい。

- 江戸中期 創業
- 江戸末期 林産物木炭問屋として山林を集積  
 ~大正 し、林業を営む
- 昭和 13 年 山長 9 代目当主榎本長平氏  
 和歌山高商を卒業し 8 代目当主榎本傳治の元、家業に就く  
 ※榎本長平氏は現会長榎本長治氏の御尊父で  
 和歌山高商 13 期ご卒業の先輩です
- 昭和 25 年 有限会社山長商店を設立
- 昭和 27 年 株式会社山長商店を設立、社長就任
- 平成 8 年 榎本長治社長就任
- 平成 9 年 プレカット工場新設、操業開始
- 平成 14 年 ISO9001:2000 認証登録
- 平成 16 年 内地材工場 JAS・A タイプ認定取得  
 (機械等級区分構造用製材・人工乾燥構造用製材)
- 平成 20 年 和歌山県 100 年企業として表彰
- 平成 22 年 プレカット機械を全面更新 合板加工機導入

令和 3 年 新製材工場 (YSS) 新設、  
 操業開始

山長商店は「山林の恵みを通して、人々の幸せと豊かさの実現に寄与する」ことを経営理念とし、先人たちの尊い汗の結晶である紀州の山林を皆様の暮らしに活かすべく、山林経営から伐採・製材・乾燥・プレカット加工までを自社で手掛ける一貫事業体制を構築、グループ会社の山長林業(株)、モック(株)、紀南砕石工業(株)と共に取り組んでいます。

新聞紙上等で森林や木材の価値が再評価されているように見えます



森林は成長過程で CO2 を吸収固定し、その木材が木造家屋に使われることで、さらに 50 年程 CO2 が固定されます。当社は木材製品の 6 割程を首都圏で販売し、都市に第二の森を作り、そこで得た利益で和歌山の森を育てています。都市と山村を循環するこの仕組みが評価され、

平成 25 年 グッドデザイン賞を受賞しました。



木材を利用することは CO2 を固定することになるため、都市の建築や学校などの非住宅分野の公共建築物の木造・木質化を進める。それは和歌山県でも力を入れています。

これは業界にとっての追い風ですが、紀州材が多く使われる為には、国内の他産地や欧州の林業・木材産業に負けない効率的な生産体制が必要です。

令和3年4月 最新鋭の自動製材工場を落成・操業しております。

林業や木材産業にプラス効果を期待できる最近の変化にどんなものがありますか。

例えば

①森林環境譲与税の創設

私企業に直接的恩恵があるものではありませんが、間伐の促進や林道整備の促進が期待されます。

②架線集材の自動化

林業において出材コストを下げる事が大きな課題です。和歌山の山林の地形では架線集材が威力を発揮しますが、これの自動化への取り組みが林業者やメーカーなどで進められています。



山長商店の伐採現場。架線を張り、伐った樹木を吊り上げて集材する。樹齢60年、高さ20mほどの杉。

③木質バイオマス発電など

国内でバイオマス発電を持たない2~3の県の一つだった和歌山県ですが、昨年田辺に設置され発電に利用されています。また、樹皮はパーク堆肥として利用されています。



写真右の装置がバイオマスボイラー。製材工程でできた木屑・皮・おがくずなどを燃料とし、製品の乾燥熱源として利用している

「木育(もくいく)」事業についてお聞かせ下さい。

幼児期から木のおもちゃに親しみ、親はそんな子供達を眺め、高校生には一次産業の一つである林業や木材産業に関心を持ってもらい、大学生、社会人まで木に触れる機会を設けて木に関心を持ってもらいたい。

紀州材を育て、伐り出して、使い、更新し次世代に繋げてゆく。そんな意識と木造住宅への関心を深めてもらいたいと願っています。



地域産業の重要な柱である林業・木材産業への榎本会長の抱負をお聞かせ下さい。

林業・木材産業の活性化を念頭において、いろいろな取り組みをしてきましたが、大きな世界経済の中にあって成果がどれだけ上がったかと言われると難しい。和歌山県・田辺市の人口減少は間違いなく進み、眼前に洋々たる視界が開けている現状には無いことは確かだ。

脱炭素でCO2排出ゼロ化とかフェーズが変わってくる局面で、森林や木材のフェーズも変わって来れることも考えられる。一步一步できることから努力して取り組んでゆくしかない。



中央 榎本会長

右 迫平隆志 取締役企画部長(大ビ49期)

(文中の「木育」事業にも取り組まれている)

左 坂本 柑芦会 和歌山支部長

本日は有難うございました。地域の産業や社会に貢献する貴社グループの益々の発展を祈念します。

特集：森林（もり）の恵み  
 森林を守り活かす ―市民活動の取り組み―

**NPO法人 わかやま環境ネットワーク**

当NPO法人は、創設時の代表の重栖氏が和歌山大学経済学部と同窓生で、現在も和歌山大学システム工学部の中島敦司先生が代表理事を務められておられます。

建材やエネルギーとして利用される木々、しかし大地に森林が生い茂っているだけでは、木は経済的な価値を持ちません。人々が共同して、伐木し、運搬し、必要な用途に加工し、流通させ、必要とされる所に届けて始めて経済的価値を發揮します。

また森林は人類を含む生態系の保全に大きな役割を果たしています。

市民グループが参画することで、森林と木は私達一般人にも身近な存在になります。

和歌山市内、毛見に同法人を訪ね、臼井達也事務局長にお話を伺いました。

貴NPO法人（わかやま環境ネットワーク）の活動の概要をお聞かせ下さい。

当法人は2000年1月の和歌山有機認証協会の設立から始まる。温暖化防止のための国際会議で取り決められた国際協定（京都議定書）の後、地球温暖化対策が重要課題となり、既に有った和歌山環境ネットワークを2005年07月に法人化し、温暖化防止に取り組む県知事指定団体になり、この両者で「人の営みが壊している自然を活かし、食とエネルギーの地域自給を目指す」活動を行っている。



正面 臼井事務局長 手前 松野編集委員

木の駅プロジェクトのことについてお聞かせ下さい。

現状では伐採しても運搬費用も出ない木は、山に放置されたままになっている。これを市民ボランティアの力で集積地まで引っ張り出して来て、晩酌代くらいの稼ぎにすれば、山は綺麗になるし、環境も守れ、人の繋がりが生まれ、森林にたいする意識も高まる、そんな主旨で取り組まれているプロジェクトである。

※1 全国的に展開されている活動で、80カ所のプロジェクトが有る。

※2 和歌山にはまだプロジェクトは無いが、2015年2月に全国のプロジェクトが一堂に会する、「木の駅サミット in わかやま」を、みなべ町で開催した。

本サミットは「木の駅立ち上げ対策」と「薪ボイラー導入の基礎」をメインテーマに開催した。

木の駅プロジェクトは高知県でNPO 土佐の森救援隊がNEDO と協働して成功を収めている林地残材収集システムの一部を、大規模でなくても全国どこでも導入できる形にして行おう社会実験である。

和歌山の山林は険しい地形で、木の伐採や搬出に危険を伴うことが多く、市民レベルでは携りづらいという問題がある。このままで良いということでは無いが、和歌山でのプロジェクトの立ち上げにはまだ少し時間が必要である。

市民活動として、森林保全について取り組んでおられることをお聞かせ下さい

意識向上の為の啓発活動としては様々な活動を行っている。実際に取り組んでいる事業の一つに「木の国クレジット」が有る。



森林のCO2吸収効果を金額換算し、商品価格に寄付額を上乗せし、吸収効果に見合った額を森林所有者に還元して保全に役立てる仕組みである。

社会課題に市民活動として取り組まれている意義や、リタイアの活躍の場を提供できる意義をお聞かせ下さい。

プロボノという言葉がある。これは社会的・公共的な目的のために、職業上のスキルや専門知識を活かしたボランティア活動を指す。

是非、現役時代に培ったスキルや知見を活かして参加して欲しいし、そんな人があれば紹介して欲しい。

本日は有難うございました。地球環境や地方創生の為に益々のご活躍を祈念いたします。

著書紹介 「木の国 熊野からの発信」

重栖隆氏(大経24)著 中公新書

山村への著者の思いが、叙事詩、抒情詩という感じでルポルタージュ風にまとめられている。

「山村や林業に明日はないと言われる、だが明後日は有るのだ。」p235 熊野の、和歌山の、日本の、そして世界の為に著者の血を吐くような思いが伝わって来る。

<著者について>

1952年(昭和27年)大阪府に生まれる

1975年 和歌山大学経済学部卒業

1997年 本書発行 当時はニュース和歌山編集長

<その後>

2005年7月 わかやま環境ネットワーク 設立 理事長

その他

和歌山県地域温暖化防止活動推進センター長

NPO和歌山有機認証協会事務局長

和歌山県リサイクル製品認定審査会委員

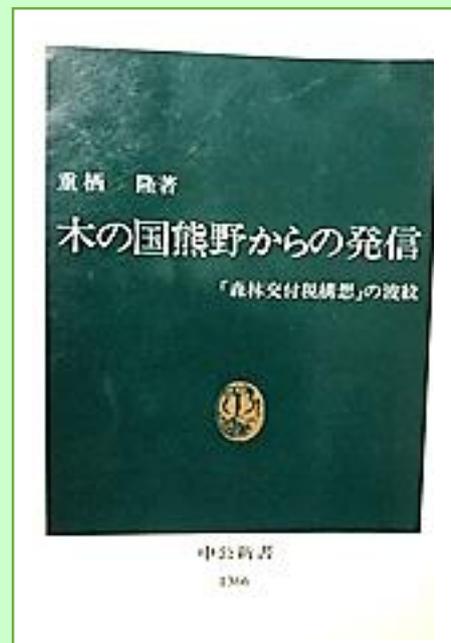
和歌山県循環型社会形成促進協会事務局長 などで活躍

2018年2月2日午前8時33分、病気により永眠されました。

享年65歳でした。

油の乗り切った時期に、もっとたくさんの事を成し遂げたと思うが、なんとも惜しいことである。

著書には他に「夢翔けるヒマラヤ」がある。



## 南紀熊野サテライト通信 vol.2

和歌山大学南紀熊野サテライト 地域連携コーディネーター 古久保綾子

コロナ禍で2年目。現在も制約のある中での生活が続いています。南紀熊野地域でもインバウンドや国内の移動が制限されて、観光や商工を含めて、様々な業種が業態の変化を求められています。教育現場に於いても今までにない早急で柔軟な対応が求められました。人を集めて実施する対面での学習機会の提供が難しくなり、昨年は講演会や塾、授業は中止を余儀なくされました。本来は自粛でしばらく様子を見るかと言いたいところでしたが、このような環境下でも地域で継続して学びたいという声は多く、学生や紀南地域の社会人の求めに対応したオンラインでの遠隔講義や観光塾、サイエンスカフェを実施しました。

本来は、和歌山大学の立地の強みでもある南紀熊野の特有の自然や歴史、文化を活用した教育研究活動をする際に、現地支援する拠点として活動していますが、現在は、移動が制限されて学生が地域に来られない状況で、大学の立地の地の利を享受できていない状態です。そんな中、自主演習クリエで活動する和大学生の発案で、サテライトが地域住民や講師方を仲介して、和歌山大学の学生と紀南の南部高校と高城中学校の生徒を zoom 配信で繋げたオンラインでのサイエンスカフェを実施しました。

カフェには和大学の研究者や地域の職人方が講師として登壇して、「みなべ・田辺の梅システム」を題材に、全6回で梅産業や製炭業、養蜂などを学びました。状況の良い時に、紀南の社会人受講生が受入先になった地域演習を体験できましたので、実際の農家や炭焼き職人の話を聞いた学生の数名は、自分の目で見ることで深い学びに繋がったようです。



地域の中高と大学生、社会人を繋いだ  
オンライン配信の様子



開催形態をオンラインと対面のハイブリッドにすることで、対面授業の取り組みも取り入れやすく、少人数、野外で出来る内容を地域から実施できればと考えています。また、礫質で崩れやすい紀南の斜面を利用して、高品質な梅を400年以上持続的に生産してきた農業システムは、ユネスコ世界農業遺産に認定され5周年を迎えました。地域の変わりゆく現状を調査研究できる大学や研究所があることは国際的にも強みです。現状は、難しい局面ですが、コロナ禍でも次の興味関心につながるように地域の同窓の皆様と現地支援をしています。

(写真：地域演習風景)

また、平成23年3月東日本大震災、同年9月和歌山県の紀伊半島大水害から10年が経過しました。東北の話題が多いですが、同じ年度に発生した台風災害も風化させてはならないと感じています。礫質の斜面に適した産業を選択して一流の県産品を作ってきた暮らしとは裏腹に、自然災害が起こりやすい地域でもあり、台風第12号豪雨による河道閉塞での湛水を発生原因とする土石流被害や河川の氾濫や土砂災害の群発、市街地の冠水、河川道路の破損や交通網の麻痺、ライフライン断絶、多数の家屋などでの全半壊被害など、記憶に新しいです。

災害後の調査で目立ったのは流木の多さでした。和歌山県内（和歌山市一新宮市）の海岸、港湾、漁港の流木漂着状況を調べると、海岸保全区域19箇所数、港湾区域5箇所数、漁港区域3箇所数、一般公共海岸9箇所数、合計36箇所数での流木漂着は7300(t)と、森林と暮らしが繋がっていることを体感した経験でした。地域の経済と環境を守るためにも広大な森林の荒廃は山村地域以外の住民にも重要な課題です。紀南の山や森林資源に関心を寄せる機会はまだ少ない傾向ですが、紀南地域ではコロナ禍で事業が自粛されるなか、高校生と和歌山大学生が連携して紀州材の木材を使った教材や動画を用意して、紀南地域の子供達が自宅でオンラインの体験ができる木育事業を実施するなど、若い世代を巻き込んだ木育活動の取り組みも産学官民で継続されています。地域には課題も多いですが新たな活路への教育支援も引き続きしています。

先が見通せない時代になり、今こそ羅針盤になる教育が大事な時だと思っています。サテライトではコロナ禍を考えるうえで重要な、情報リテラシーや福祉、哲学等を取り扱った授業を新設しました。令和3年度前期からは、オンライン授業から対面授業に戻る予定です。オンラインと対面はどちらも利点があり、対面授業での大教室で漫然と講義を聞くよりも、画面越しに教員と対自して受講できる講義は魅力的ですし、資料も手近にみながら受講できるのは学習効果があるように感じます。サテライトの講義でも、社会人と学生、



地元の高校生が同じ画面上の講義を共有しながら受講しており意見交換を活発にしています。学生や生徒方が実務者や社会人から学ぶことも多いと考えています。また、移動する時間や費用が抑えられるのでコロナ後の選択肢としても和歌山県の南部からの中継も、もっと授業講義に取り入れてもらえる提案が出来れば面白いです。地域には学習を支援する同窓の先輩方がたくさんおられます。

広大な和歌山県に於いて教育の距離的な機会格差を是正する良い手段でもあると思います。座学をオンラインで、演習を現場で、など役割の中で対応できれば良いと考えています。サテライトでのオンラインの遠隔授業導入にあたっては事前講習会を実施して、実際に使う zoom の使い方を講習しました。高齢になり遠隔授業の受講を諦めていた方も、実施にあたり端末を購入して授業に来られました。このような苦しい時ですが、地域の皆さま方に必要とされるような大学の教育を繋ぐご支援が出来て、とても嬉しく思いました。

何かを学び始めるのに年齢は関係ないと改めて感じた一年でした。日々変化する地域の課題と接する紀南に配置されているからこそできる取り組みや、社会環境が苦難な時にこそ課題を一緒に乗り越える知識を地域とともに付けていくことが、数年後の当地域のために必要だと感じています。

また、先日、感染対策をして実施した観光塾では、コロナ禍で先が見えない県内の観光事業者や自治体職員、地方議員等が定員満席で受講しました。県外者はオンラインで受講し、双方にメリットもありました。社会が混迷するときこそ教育や教養を身近に触れることがその先の希望の光となります。教育機会の提供を諦めないことが役割だと感じています。そのような地域拠点の存在で有れるように日々取り組んでいます。大学の持つ専門分野との連携で地域の活動も支援していきながら、一緒に地域を耕すことで学生が入れるフィールドも肥えていくのだと感じます。サテライトでは優先的に地域での次世代の人材育成、教育分野を結ぶ事業に参画しています。設置15年経過して地域の中核人材として、現代に合わせた活動を模索しながら課題を克服しようとする人材が育っています。量から質の転化や地域社会での貢献も求められています。



南紀熊野観光塾  
第8期 基礎講習



日々刻々と変化する次代で果たすべき役割は何か。新しい技術との融合や、紀南の資源を保全活用する視点、その資源を持続可能な経済活動や地域振興に繋げる教育機会の創出など、今後も紀南地域での本学の調査活動や共同研究、研究成果の地域還元としての地元学の開講等、知の拠点として地域と寄り添いながら、学生や社会人の課題を聞き取り、即した学びの機会を設けて同窓の皆様と共に活動を進めていきます。今後ともご支援ご協力の程、宜しく願いいたします。

塾生講習会場の様子 (R2年11月実施)

## 「きのくに活性化センター」の活動

きのくに活性化センター事務局長  
西川 一弘

きのくに活性化センター（会長：榎本長治田辺商工会議所会頭）は、2002年4月、紀南地域をフィールドに和歌山大学・自治体・企業・市民などがパートナーとなり、地域の抱える諸問題について協同して調査や研究を行い、その成果を地域の活性化に役立てることを目的として設立されました。

田辺・新宮の両周辺広域市町村圏の自治体、田辺・新宮の両商工会議所、JA紀南、和歌山県、和歌山大学によって組織されています。センターは報告書や提言だけにとどまらず、プロジェクトとして事業を自ら実践することを目指しています。これまでのセンターの取組が財産となり、2005年には和歌山大学紀南サテライト（当時）が設置され、センターとサテライトは、紀南地域における高等教育の取組の“両輪”となっています。

センターでは、自治体からの地域づくりや産業振興に係る調査・受託研究や食や文化、観光に関するシンポジウムやマップづくりなどの独自事業を展開してきました。2018年度から執行部・事務局体制も変わり、近年では明日の地域を支える「(域内の)若者や次世代」、および「(学生を含む域外からの)関係人口」への支援事業を強化しつつあります。

この間、メディアなどで叫ばれている人口減少問題などに対して、センターとしても取組を進めていくことを目指しています。そのひとつの事業が、2019年度から始まった「きのくに青少年懸賞事業」です。

この事業では、紀南地域で取組まれているまちづくり・ふるさとづくり活動や新商品開発、起業、Iターン・関係人口の増加、高校の魅力化活動など、未来が明るくなる動きをさらに強固にし、新しい人材を創出する機運を高めていくこと、次世代を担う青少年のふるさとに対する愛着や自信の醸成を図ることを目的としています。論文だけではなく、「動画部門」を設置していること、概ね20歳以下であれ

ば小学生からでも応募可能にしていることなど、型にはまらない募集方法を取っています。まだまだ認知不足が課題ですが、応募いただいた作品を見ますと、地域の誇りや可能性を感じさせるものばかりです。

今後もセンターでは、地域の魅力を発信する交流事業や紀南地域の偉人を発信する事業、大学の教育研究と連携した事業なども進めていく予定です。

皆さまのご協力とご支援をよろしくお願いいたします。

2019年度きのくに青少年懸賞事業表彰式



和歌山県紀南地方の自治体や企業、和歌山大学などでつくる「きのくに活性化センター」（榎本長治会長）が、19歳以下の若者に紀南地域活性化のアイデアを募集し、優秀な作品に奨学金を交付する「青少年懸賞事業」（紀伊民報が後援）の表彰式が、田辺市内のホテルであり、論文と動画部門で計12人を表彰した。榎本長治会長（右）から表彰される動画部門最優秀賞の花尻小町さん

2021年03月30日

紀伊民報ホームページAGARAより

（本コラムは編集部が作成しました）

## クラブ紹介 ヨット部

和歌山大学体育会ヨット部は、1949年に創部され、今年で73年目を迎える歴史のある団体です。和歌山県は和歌浦に艇庫を有し、和歌山セーリングセンターを拠点として日々活動しています。

しばしば「ヨットってどんなの？何するの？」と聞かれますが、ヨットは「セール」と呼ばれる帆2枚と「風」を駆使して、決められたコースをどれだけ早くフィニッシュ出来るのかを競う競技です。

さて、そんなヨット部ですが2020年、関西インカレにおいて、国際470級第2位、国際スナイプ級第4位、総合第3位という成績を収めることが出来、国際470級においては、部としても8年ぶりとなる全日本インカレへの出場を成し遂げました。



また、同年に開催された全日本学生ヨット個人選手権大会へも、村瀬・犬伏ペアが、関西学生ヨット個人選手権大会において国際470級第3位の成績を収め、関西代表として出場を遂げました。

このような成績を収めることが出来たのも、総監督をはじめとするスタッフ陣、OB・OG、セーリングセンター、大学関係者など多くの方々のご支援ご協力があったからにはほかなりません。

2021年ももちろん目指すは全日本インカレ出場です。簡単な道のりではないと思いますが、日頃から感謝の気持ちを忘れることなく、チーム一丸となって目標達成のために活動しています。



和歌山大学の卒業生・関係者の皆さんの参加をお待ちします。

### 紀雲「書評」同好会 のご案内

会費不要 欠席自由 退会自由 和歌山市駅前会場で月1回開催

ジャンルを問いません 読んだ本の感想を交えて紹介します。お問合せ：090-8533-6614 (渥美)



留学生寄稿

**コロナ禍下の留学生生活**

和歌山大学経済学部経済研究科 劉 育伯

**2020年3月9日 孤独**

バイトを辞めて9日経ったのに、偶にバイトしていた頃の憂鬱な時期を思い浮かべていた。ほのかにタバコの匂いがする僕の部屋の床は、カップ麺の容器や空き缶で満たされ、立っている場所すらないほど汚かった。

鏡の中に映った僕は、薄暗い光りの中で余りにも痩せた顔だった。バイトで疲れていたと言っても、なかなか眠れなかった。そしてまだゲームをやっていた。

コロナ禍のせいでバイトを辞めた。臆病な僕は、バイトで繋がっていた外との最後の繋がりを自らの手で切ってしまった。一緒にご飯を食べる人もいなくなったし、話してくれる相手もいなくなった。しかし、この孤独の中で僕は失ったものの代わりに、必ず何か得るものが有るはずだと言う気がした。

一人の時間が多くなって、買い物に行ったり自炊したり、部屋の掃除も始めた。生活が徐々に規則正しくなってきたので、心も少し落ち着くようになった。

昔は悪いところしか見えないから、自分が何を求めているのかわからなくなってしまっていたのだろうか？ たぶん人生は山登りのようなものかもしれないと今になって気づいた。山登りの中にも歩きにくい険しいところも歩きやすい平坦なところも必ずあると思う。そして、どの山を目指せば良いのか？いくつかの選択肢の中から自分にとって一番良い選択をしないといけない。前に進みながら、どこで歯をくいしばって頑張るのか、どこで気を緩めて休みを取るのか。自分自身の心に耳を傾けて問かけないといけないと思う。それができれば、目の前の険しさを乗り越えたら、次の山に向けて進んで行けるようになるはずだ。

今日僕も一歩前に進んだと思う。

**2020年11月26日 時間について思ったこと**

1371年、天文学者イブン・シャーティルが人類初の精巧な日時計を作った。それ以来、私達人類は以前より正確な時間をコントロールできるようになった。と言うより時間にコントロールされるようになってしまったのかもしれない。

傍の時計の数字がいつまでも勢い良く確実に増えていて、なんだか化け物のように見えてきた。そして何もできなくなった。

“一日が48時間だったらいいのに...”と思っていたら、Lineで留学生支援NPO男性メンバーの高橋さんから「明日、時間があれば昼飯を一緒にとと思いますが。」というメッセージが届いた。

出かけるのは何日ぶりだろうか。リモート授業を始めてから、どこかに遊びに行くとか、外食とか考える余裕もなくなってきた。留学生にとって、たぶんリモート授業がかなり馴染みやすくして便利なシステムだ。授業の内容がいつでも何度でも繰り返し聞ける。お陰で、きちんと授業の内容を聞き取ったりメモしたりすることができるようになった。しかし中途半端なことをしたくないので、かなり多くの時間がかかってしまって、徐々に時間の感覚をなくしていた。

資料や論文を探しているうちに、いつの間にかもう夜になっていた。キーボードを打っていて、ハッと時計を見たら深夜3時になっていた。時々夜更かしをする時もあった。毎日時間に追いかけるようになったのはいつからだったか。そのプレッシャーが余りにも重過ぎて息ができなくなりそうになった。



加太の休暇村展望台から地の島方面を望む

そのような僕を誘ってくれた高橋さんと午後 3 時過ぎ、加太の休暇村展望台に着いた。何度も加太に来たことがあったのに、ここは初めてだった。絵になるような絶景、地ノ島がすぐ目の前に見えていた。溜まっていたストレスも無くなったように感じた。優しく暖かい日差しが私達を包んでくれた。

今この時間をゆっくり味わった。久々に新鮮な空気が肺に入って、生き返ったような感じがした。なんだか時間の流れが緩くなった気がした。効率良く時間を使うことより、今の時間とどう付き合うのかがもっと大事だと思った。

## 編集部から

### 追悼

前柑芦会和歌山支部長で、「柑芦わかやま」の編集業務も担っておられた久山稔様が昨年九月に 84 歳でご逝去されました。ここに在りし日を偲び慎んでご冥福をお祈りします。



左：フレッシュ人材  
懇談会学生達に K J  
法の指導 松下会館



右：留学生と合唱演  
奏 NPO 法人  
ウインコンコード



昭和 11 年 2 月生まれ  
昭和 33 年 和歌山大学経済学部卒業  
同年 (株) 紀陽銀行に入行  
昭和 43 年 同銀行従業員組合執行委員長就任  
昭和 63 年 同銀行取締役役に就任  
平成 10 年 同銀行専務取締役退任  
平成 15 年 和歌山大学大学院経済学研究科修了



## 「勤且学」の系譜を繋ごう

松下会館にある碑文には、昭和二十九年（1954 年）四月に和歌山大学経済短期大学部が高松学舎に併設されたことが記されています。経済短大は、その後、平成 5 年（1993 年）経済学部夜間主コース（平成 19 年廃止）に引き継がれました。柑芦会和歌山支部会員は約 5 千人と言われますが、その大半は働きながら学んだ O B 達です。社会人学生が学びの主流となるべき今、後輩たちにその軌跡を伝えるためにも、是非とも機関紙への寄稿をお願いします。

## 編集後記

「森林（もり）の恵み」を特集しました。かつて日々木と共に有った私達の生活に思いを馳せ、地元和歌山で森林木材に関わるお仕事をしている方々を取り上げました。今号も多くの皆様のご協力を頂き発行に漕ぎ付けられましたことを、お礼申し上げます。

「柑芦わかやま」編集委員  
松野浩行、山中盛義、西川一弘  
(事務局) 渥美正道、渥美盛也  
atsumi@beach.ocn.ne.jp